

フィリピン商業銀行の経営効率性分析

アジア経済研究所 齋藤 純

フィリピンでは、他のASEAN諸国に先駆けて1980年代初めから金利全面自由化を含む金融自由化政策が実施されてきた。金融自由化論の基本的な枠組みに従えば、金融自由化により、市場メカニズムによる効率的資源分配が達成され、投資の生産性が向上、経済成長の促進につながる。しかしフィリピンでは、金融自由化を受けて、実質金利の上昇、金融機関による貸出額増など金融仲介の拡大は見られたが、国内貯蓄、国内投資は共に低下傾向にあり、マクロ情勢も悪化していった。80年代半ばにはマイナス成長を記録している。金融自由化開始から30年経た現在においても良好な経済情勢とは言い難い。その一方で金融自由化後、競争度の高まったフィリピンの銀行業において、資金の効率的運用と高収益性が観察されている。資源配分上の非効率によるマクロ経済の悪化と、経営効率上の効率によるフィリピン銀行業の高収益性との対比は興味深い。本稿では、フィリピン銀行業の効率性をマルムクイストDEAにより計測することを中心的課題としている。

マルムクイストDEAによるフィリピン銀行業の効率性分析から得られた結論を整理すると以下ようになる。観察期間である2004–2007年においては、フィリピン銀行業全体の生産性は大きく改善していた。特に民間地場商業銀行、政府系銀行が各自の生産技術の改善を行ったことによって、結果的にフィリピン銀行業全体の生産性を拡張し続けることができた。